

神奈川ゐのはな会

富田 裕

ゐのはな会の事ども

私が初めてゐのはな会を意識したのは、大学の卒業式の日であったと思う。

古い木造ではあるが立派な講堂の前にテントを張り、何人かの偉そうな先輩から“卒業おめでとう”と言われご馳走になったことを覚えている。昭和30年のことだから、昔々ということだろう。

その後、整形外科教室に入り長く医局長を務めた。教授は鈴木次郎先生で、病院長、学部長を務めておられ、このころ時々“四金会”へ行くと行っておられたが、ついぞゐのはな会に関心があったという記憶はない。

その後昭和43年に大学を離れ横浜に病院を開設することとなった。

横浜市金沢区において当時、区医師会会長は先輩の堀内和之（昭24専卒）先生で、又、2年先輩で旧知の松本龍二（昭28卒）先生も近くにおられて、お蔭で病院の開業も順調に行き、同窓はありがたいものと感激したものであった。

又、当時神奈川ゐのはな会会長は、横浜市鶴見区の平和病院院長、安孫子連四郎（昭10卒）先生であり、県病院協会の会長には川崎市の太田病院院長、太田清一（大14卒）先生がおられ病院協会にもお世話になったことが思い出される。

そんなこんなで、昭和63年に末永直光（昭20専卒）先生から会長を引き継ぐことになって、もはや20数年になってしまった。

又、この間渡辺武（昭27卒）先生、当時の全国ゐのはな会会長から副会長を命ぜられ、同窓会についていろいろ思うようになった。

—— 大学ゐのはな会の成立 ——

大学ゐのはな会の成立については、“千葉大学医学部八十五年史”に児玉勝年（昭5卒）先生が詳しく述べられ、又生前の井出源四郎（昭19卒）先生からも直接この頃の経過を聞くことがあった。

概略は、医科大学卒の先輩は、多少のプライド？があって、前身校の同窓会ゐのはな会とは一線を画したというのであった。今日では考えられないことである。

又、当時の大学教授会は、医科大学同窓会とゐのはな会の合同には断固として反対であったというのである。

そしてゐのはな同窓会の成立は、大学設立後18年経過した昭和15年であったというのである。

なぜ教授会が同窓会に反対したかは推測の域を出ないが、当時の教授会の大多数が東大卒であったことと、無縁ではないと思わざるを得ない。



昭和10年2月4日 横浜ゐのはな会

このように、大学ゐのはな会の成立は多分に政治的であったと思われる。

— 地方ゐのはな会の成立 —

私が神奈川ゐのはな会会長をお引き受けしてまず行ったことは、会報の発刊である。

会報“ゐのはな かながわ”は平成元年に創刊され、平成21年に20号を発刊した。

会員の皆様から毎号面白い記事が寄せられるが、その中で松本龍二（昭28卒）先生が横浜市における千葉出身者の消息を調べておられ“ゐのはな かながわ”に4回にわたり寄稿しておられるので是非とも一読されたい。

しかしながら、大先輩、津田修二（大12卒）先生に伺った時にも、ついに神奈川或いは横浜ゐのはな会の成立の経緯は分からずじまいであった。

最も確かなのは、松本龍二先生の手元にある“昭和拾年二月四日 横浜ゐのはな会”と書かれた、一葉の写真で38名が写っている。

古希、還暦の3名の先生を祝ったもののようで、中央が長尾折三（明23卒）先生で古希、向かって右が中村正巳（明30卒）先生、左側が矢崎嘉六（明33卒）先生である。

しかし横浜ゐのはな会が何時ごろ創設されたかは、松本先生にも明らかでないと結んでいる。

戦中戦後の神奈川ゐのはな会歴代会長は次のようである。

津田修二（大12卒） 不詳～昭和50年10月
安孫子連四郎（昭10卒）

昭和50年11月～昭和53年6月

田中 洋（昭15卒） 昭和53年7月～昭和57年3月

末永直光（昭20専卒） 昭和57年4月～昭和63年3月
富田 裕（昭30卒） 昭和63年4月～平成22年6月
森 豊（昭37卒） 平成22年7月～現在
である。

結局のところ、神奈川或いは横浜ゐのはな会の成り立ちは判らずじまいであるが、平成20年発行の19号“ゐのはな かながわ”には広田和俊（昭27卒）先生の次の一文がある。

“同窓会の本質は、人生の青春時代を同じ学び舎で生きてきた人間同士が、実社会に出て相互の助け合い、啓発し合いを中軸とした親睦なのだと思う。現代はその意義も認めず関心も全くななくなっている。これは人間としても、心が干からびかけて社会的連帯の必要性の認識が消失してしまっているからであろう。僕はこの現象を戦後教育の空洞化に由来する一過性の現象であると思っている。この思いがやがて杞憂となって、世の中がもっと人情味豊かな世界となって、お互いに溶け合う喜びを謳歌し合えるよう、これからも神奈川ゐのはな会が、道標を立てていくことを念じている。”

全く同感で、素晴らしい言葉と思っている。

最近頂いた群馬県ゐのはな会会報第7号には、会長 鹿山徳男（昭29卒）先生が、群馬県ゐのはな会には古い歴史があるが記録として残すことをしていなかったのが残念であると記されている。このように、地方ゐのはな会は遠い明治に、各地の同窓が母校を懐かしみ、或いは助け合い、自然発生的に生まれたのではないと思われる。

現在、神奈川ゐのはな会は会員約300名、年1回の総会と会報、及び会員名簿発行が主たる行事である。総会には、神奈川県出身の現役学生を招待し、又会員家族の出席も歓迎して毎回70～80名の出席を



神奈川ゐのはな会 平成21年7月11日 於 キャメロットジャパン

第4章 同窓の発展

得ている。写真は平成21年度総会でゲストに岸恵子氏を迎え盛会であった。

— これからのゐのはな会 —

最近の毎日新聞には、国立大学の法人化の問題が、“大学大競争時代 国立大法人化の功罪”シリーズとして連載されていた。我々はよく知らなかったが、国立大学は国立大学法人という独立法人化され、評議会による運営、民間との共同研究或いは産学共同化等々、大学自体が収入を計り、寄付の受け皿となり、逆に国の補助金は毎年削減されるようである。従って、大学はそれ自体が経営運営の努力を求められ、その如何によって大学間格差がつくという図式になってきたようである。極論すると国立大学は限りなく私学に近くなり、又大学間の競争原理が働くようになるとのことである。

このシリーズでは法人化は東大に圧倒的に有利に働き、地方大学の衰退が懸念されるといっている。

同窓会は本来的には同窓生の親睦、助け合いが目的であるが、更に母校への援助がもうひとつの目的であって、法人化によってこれがより重要となって

きたのではないかと思う。このあたりで、大学のための大学による大学の同窓会：本部ゐのはな会と、会員の親睦と助け合いを目的として作られた、各地ゐのはな会との、大同団結が求められるのではないだろうか。

本部ゐのはな会はその独善的運営を改め、地方ゐのはな会の意を入れ、全同窓生のための、そして大学のための同窓会に生まれ変わる必要があると思う。

又今後、烏合の衆ともいえる新制千葉大学、即ち千葉大学の“タニマチ”としての同窓会をどう作り上げていくかという問題にも直面しているのではないのでしょうか。

それにしても大学法人化について、大学側より同窓生に何の説明もないのには驚きで、有力私学のように大学が同窓生を大事にし、又同窓生は大学を全面的にバックアップするという体制づくりが急速の課題と思う。

最後に千葉大学と、ゐのはな同窓会の発展を願ってやまない。

(とみた ゆたか)